

## セッションNo.2の発表に対するコメント

生井智紹

スタン氏の御発表は、『ナーマサンギーティ』(Namasangīthi)に最後期の大乗思想から論ぜられる文殊についてであった。問題化されるのは、文殊菩薩が自生仏(Svayambhū)という究極の観点から捉えられている点である。つまり、菩薩とはいえ本来的には常住の如来にほかならないという認識から、文殊を如来を生み出すものであるとする、無始時來の如来の出現についてである。いっぽう佐藤氏は、釈尊を成道へと導くスジャータの供養と対比される如来を般涅槃示現へと導く純陀の供養を、『大乘般涅槃經』の描写から、その大乘的特質を示そうとされる。スタン氏は『ナーマサンギーティ』を博士取得論文のテーマとされ、佐藤氏は『阿闍佉国經』から大乘經典の成立問題を課題とされ、最近では『大乘般涅槃經』の文献学的考察に従事されている。いずれもがそれぞれの御研究のキャリアを前提とされて、文殊、純陀という「仏弟子をつうじての信仰」という今回の課題に取り組まれたものである。

ご発表の論旨の詳細は、両氏のご論文にお任せすることにした。ここでは、各々のご発表がどのような観点から仏教信仰の歴史を明らかにするかをわたしなりの視点からまとめて、お二人の研究への要望を述べて、コメントとしておきたい。

「無始無終」(anadyanta/anadinidha)ということはお二人の御発表をまとめるキータームになるかと思う。縁起

あるいは輪廻界の無始無終と、仏もしくは法界の無始無終という、並行する二つの無始無終性である。この二つの無始無終には、交点となる二つの契機がある。つまり、八相成道という如来不思議のうちの、如来成菩提という無始無終の輪廻界への法界出現の契機と、常住の如来の般涅槃示現という輪廻の終焉の契機とである。カマラシーラ (Kamastila) が、『真理綱要』二十二章の論議の註釈 (Tathasam-grahapanyika) に、「愚か者にとって輪廻は永久」との釈尊のおこたばを取り上げて輪廻の終焉について問題化し、また明恵上人が『華嚴唯心義』下巻で『大乘起信論』の如来藏説に関連し法身出現について問題化した点である。

スタン氏の研究は、『ナーマサンギーティ』の記述を追うことから、そこに描かれる文殊菩薩の性格を明らかにされる。『ナーマサンギーティ』に説かれる文殊の特異な性格、例えば、諸仏を産み出す本初来の仏というような独自の観点を詳細に紹介されるものであった。

ただ、その『ナーマサンギーティ』の文殊の特異性を扱うにしても、初期大乘以来の經典に描かれてきた文殊菩薩の性格を前提として『ナーマサンギーティ』の文殊がある、という点をまず踏まえ置く必要があるかと思われる。それは、『ナーマサンギーティ』の性格を考察する上でも重要な視点となると思われる。

初期大乘經典以来、「初発菩提心」と関連して文殊が登場する場面は多く、『入法界品』(Candavyūha) では、文殊のうながしによる発心からスダナ (Sudhana) の求法の旅が始まる。後期大乘の菩提心論書にもよく引用される『伽耶山頂経』(Gyāsāstra) は、「初発菩提心」の説示に文殊が関わる代表的な大乘經典である。解脱門の道にあつて維摩に不二法門の説法をうながすなど、大乘經典では、文殊が輪廻界から法界への最初の導き手、あるいは初発菩提心の説示に関連して役割を担う描写が顕著である。

密教文献、特に『初会の金剛頂経』以来、文殊は確かに金剛界曼荼羅の金剛因 (Vajrahetu) 菩薩という法部四菩薩の一人として「説法」にかかわって西方に位置付けられる。スダン氏の御指摘にもあるように、ついには「法界語自在」という觀念に関連して説かれるまでに至る。それにしても、菩提の本初來の因としての菩提心を代表する菩薩という初期大乘經典以来の文殊信仰は、菩提心を代表する阿闍如来を中心とする東方金剛部族とも関連がないわけではない。そういう点から見れば、スダン氏が問題化する「金剛菩提心部」という『ナーマサンギーテイ』独自の性格をも、文殊という尊格は最初から孕んでいる。そのような意味でも、『ナーマサンギーテイ』の叙述の詳細な検討から文殊の性格を探るにしても、大乘經典の思想史に文殊の描写を一応辿ってこそ、『ナーマサンギーテイ』における描写の問題を深化させていくことができるように思われる。

いっぽう、なぜ、『ナーマサンギーテイ』の信仰が、文殊を対象とするのか、という検討も重要と思われる。文殊に対する信仰が『ナーマサンギーテイ』の背景となる地域的歴史的状况にどう拡大されなぜ支持されたのか、という信仰者側の背景状況を示すことが必要である。文殊の性格を定型化していく歴史的状况を明らかにすると思われるからである。本学会の基本テーマが「仏弟子と信仰」という点にあるのだから、文殊という尊格のいかなる点が人々から『ナーマサンギーテイ』という信仰を得るに至ったのかという側面からの、アプローチが起点にあってもいいかと思う。現在ネパールの宗教現象と文殊との関わりを信仰者側の歴史的状况から明らかにするというアプローチ、あるいは密教の文殊信仰で、なぜその尊格が『ナーマサンギーテイ』のような信仰儀礼形態の対象にされていたのか、という考察も、大切であろうかと思われる。末法の認識という歴史的背景を前提としたことから、阿弥陀を対象とした浄土教の展開が中国日本における信仰形態の特質となり、阿弥陀仏の性格を信仰者側から鮮明に固定化していく。同じ意

味で、『ナーマサンギーテイ』を中心とする信仰形態の背景事情から、人々に信仰される文殊の特質となるものが見えてくるのではないだろうか。

口頭発表の時点で、日本語の訳語選定について、若干の注意を促した。例えば、通例、「不二」とすべき“advaya”の訳語として「無二」を使用していた点など細かい点についてである。西藏語訳の注釈文献によく見られるサンスクリット語の複合語分解 (vibhāṅga) の現代日本語への翻訳などについても、さらなる配慮があれば、より完成度の高い御発表になるかと思われた。

もう一つは、輪廻の終焉あるいは法身の顕在化を扱う『大乘涅槃經』に対する、佐藤氏の論である。

佐藤氏は、スジャータ (Sujāta) と純陀の二供養に対する阿含の観点と『大乘涅槃經』の二供養に対する大乘の観点を対比することから、純陀の取り扱い方の変化を明らかにされようとしている。

そのためには阿含における純陀の叙述と『大乘涅槃經』の叙述を対比するという佐藤氏が取り組まれた文献的処理が、まず確かに必要かと思われる。

しかし、『大乘涅槃經』において、純陀は、ただ般涅槃に導く供養者としてだけではなく、般涅槃の大乘的意味を明かす契機をもたらすという点から叙述されている。したがって、大乘的な如来般涅槃とは何かという經典の主題を捉えた上で、純陀登場の脈絡的意義をも明確にしていく必要があるかと思われる。その点で、最初に登場する文殊の発言はその主題と純陀との関わりを論ずる場合には必須の前提となるはずである。『大乘涅槃經』のテーマ全体から如来の涅槃の描写する際の純陀の役割、位置を検討することから、仏弟子純陀を通じて示される『大乘涅槃經』の信仰がより明確化されたはずである。特に、『大乘涅槃經』でも最初に現れる文殊菩薩の発言などにさらに綿密に配慮して、

全体の脈絡文脈から空、不二、如来常住など独自の観点を明かすことよってこそ、この經典における純陀の登場の意図が明らかにされるかと思われる。その点への考察を深めることから、御発表の論旨、内容をより説得力を持ったものとする事ができたかと思われる。

空性を観る般若智への導き手として扱われる文殊は、初期大乘以来、如来不二智の発現の根源たる初菩提心に関連してイメージ化されてきた。本源の法界、仏自身が本来的に始めなき本初来の如来常住という究極の観点から見れば、その文殊も、もともと本来は自生仏という性格のものである。それまでに敷衍した密教的観点から位置づけられた『ナーマサンギーティ』の信仰も、文殊という尊格をつうじて明らかにされる。いっぽう、本来常住の如来があえて人々に輪廻の終焉を示すため、その涅槃へと導く役割を与えられて最後の供養を行なった純陀をつうじ、『大乘涅槃經』は常住の金剛身への信仰を明かす。

そのいずれもが、成菩提、苦の終焉という、如来の不可思議の大事跡によってはじめて明らかにする無始無終の法界顕現の契機を取り扱うことになる。まったく関連を考慮することなく独自におすすめたご研究を、あえてコメンテーターとしてまとめるという立場から述べさせていただけば、お二人のご発表は、それぞれ、文殊、純陀という仏弟子をつうじて密教、不二中乗それぞれの仏教の信仰のあり方を示すもの、と理解されよう。

